



寺崎誠三、一年二ヶ月ぶりステップスギャラリー四度目の個展である。一度目はバンコク、メキシコ等世界中、二度目は NYC、三度目は Tokyo と展開してきたが、今回は人物写真《ichica》シリーズである。大型、小型を織り交ぜて 22 作品を出品した。自らの孫を被写体としながらも、なんと客観的で、冷静な写真であろう。寺崎は生粋のカメラマンなのだ。かといって、愛情がないわけでもない。しかし、カメラマンが被写体に与える愛情とは、欠落してはならない。報道でも、リアリズムでも、広告でも同様であろう。しかしこの展覧会の写真は、特別な雰囲気を持

えている。それは、総てがスクープでないにも関わらず、総てがスクープである点だと思う。客観的であるのだから、悪戯にシャッターを切りまくるのではなく、その瞬間を待っている。しかし「その瞬間」は絵になる瞬間でも、新生児が特別な行動を取る特殊な瞬間でもない。寺崎が永年培い、自らの体の中に染み込ませているカメラマンとしてのキャリアの「瞬間 = スクープ」でもない。つまり、この写真は寺崎の意図ではなくとも、寺崎のこれまでの写真と、人類がこれまで撮影してきた写真を超えていこう、新しい写真の姿を掘り起こそうという野心に満ち溢れている。

